



普通高等教育“十一五”国家级规划教材

21世纪日语本科系列多媒体教材

# 标准日语 古典语法教程

陈访泽 刘小珊 编著

华南理工大学出版社

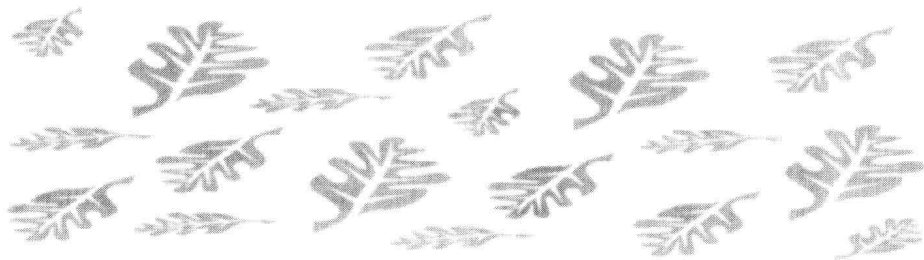


普通高等教育“十一五”国家级规划教材  
21 世纪日语本科系

# 标准日语

# 古典语法教程

陈访泽 刘小珊 编著



华南理工大学出版社

· 广州 ·

## 内 容 简 介

本教程以词法为主,不涉及句法,另外增补了敬语法和特点鲜明的古典文体内容。全书分为语法内容九章及古典作品十四部分。第一章为古典语绪论,概述古典日语语法的范围和特点;第二章至第七章为词法,按词类划分进行描述;第八章为敬语法,采用了传统的敬语分类;第九章为古典文体,重点描述汉文训读和候文。

本教程可用作日语专业本科生高年级阶段的专业课教材,也适合作日语专业研究生的基础课程教材。

## 图书在版编目(CIP)数据

标准日语古典语法教程/陈访泽,刘小珊编著. —广州:华南理工大学出版社, 2010. 1

(21世纪日语本科系列多媒体教材)

ISBN 978-7-5623-3235-0

I. 标… II. ①陈…②刘… III. 日语—语法—高等学校—教材 IV. H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2009) 第 242812 号

总发行: 华南理工大学出版社 (广州五山华南理工大学 17 号楼, 邮编 510640)

营销部电话: 020-87113487 87110964 87111048 (传真)

E-mail: scutc13@scut.edu.cn

<http://www.scutpress.com.cn>

责任编辑: 徐明媛

印刷者: 广州市穗彩印厂

开本: 787 mm × 960 mm 1/16 印张: 20.75 字数: 406 千

版次: 2010 年 1 月第 1 版 2010 年 1 月第 1 次印刷

印数: 1 ~ 3000 册

定 价: 35.00 元

版权所有 盗版必究



# 前 言

语法到底是什么？把语言想象成一个游戏，你每天都通过听、说、读、写等各种各样的途径来参与这个游戏。每个游戏都有游戏规则，语法其实就是这个游戏的规则。实际上，你的任何活动都遵循了一定的规则。

本教程为普通高等教育“十一五”国家级规划教材。在教育部高等院校日语专业教学指导委员会和华南理工大学出版社的支持下，前后历经4年编著而成。本教程从2003年开始以试用教材的形式在日语专业的高年级教学中使用，由于体系性和针对性强，难度适中，内容能够适合其他相关课程的学习，有配套的练习题便于教师讲课和学生自主学习，受到了较好的评价。通过本教程的学习，学生的日语水平提高很快。纳入国家级规划教材后，在编写本教程的同时，我们于2006年初开始在原有的基础上进行充实和修改，根据需要增补了敬语法和候文等内容，使教材更加趋于完善，适合不同层次的学习。

古典日语一般是作为日语专业的选修课程来开设，有关这方面的著作和参考书也出版了不少。但由于这一学科内容在国内的专业学习中还不是很普及，我们在安排本教程的结构和内容时确定了这样几点原则：（1）充分吸收以往的古典日语语法书中科学合理的部分；（2）最大限度地反映这一学科的新的成熟的研究成果；（3）尽量从学科发展的实际需要出发来设计和安排内容。本教程以词法为主，不涉及句法。另外增补了敬语法和特点鲜明的古典文体内容，全书分为语法内容九章及古典作品十四部分。第一章为古典语绪论，概述古典日语语法的范围和特点；第二章至第七章为词法，按词类划分进行描述；第八章为敬语法，采用了传统的敬语分类；第九章为古典文体，重点描述汉文训读和候文。其中关于候文语法的描述是国内同类教材中首次比较系统的尝试，也是本教程的特色，可以为解读日语的相关史料提供支持。古典作品作为语法

学习的调节和巩固，可供适当选用。

为了配合日语专业高年级的其他课程的需要，以及近年来不断增长的日语四八级考试和研究生入学考试的需求，本教程全部采用日语表述。本教程可用作日语专业本科生高年级阶段的专业课教材，也可以用作日语专业研究生的基础课程教材。课程按每周2课时开设，可满足1学期的使用。

本教程由陈访泽、刘小珊编著，李惠清、程亮、蔡京春为本教程部分章节的初稿编写工作提供了协助。本教程的编写得到了国家重点文科基地——广东外语外贸大学外国语言学及应用语言学研究中心的资助。此外，在本书的编写过程中参考了相关著作和研究文献，采用了相关电子图书的资料，在此谨向各位编著者致谢！内容虽经过多次修改，但不妥之处在所难免，敬请广大读者批评指正。

陈访泽

2009年7月于日本京都

# 目 录

第一章 古典語序説 .....	(1)
第一節 古典日本語の概念 .....	(1)
一、口頭語と文章語 .....	(1)
二、現代語と古典語 .....	(1)
三、日本の歴史的時代区分 .....	(2)
第二節 歴史的仮名遣 .....	(3)
一、歴史的仮名遣の成立 .....	(3)
二、歴史的仮名遣と現代仮名遣の対照 .....	(4)
第三節 古典日本語の品詞分類と構造特徴 .....	(7)
一、品詞分類 .....	(8)
二、構造特徴 .....	(9)
練習問題一 .....	(10)
第二章 体 言 .....	(14)
第一節 名 詞 .....	(14)
一、名詞の分類 .....	(14)
二、名詞の文法特徴 .....	(16)
第二節 代名詞 .....	(18)
一、人称代名詞 .....	(18)
二、指示代名詞 .....	(20)
三、反照代名詞 .....	(20)
第三節 数 詞 .....	(21)
一、数詞の分類 .....	(22)
二、数詞の文法特徴 .....	(26)
第四節 特徴のある名詞 .....	(27)
一、形式名詞 .....	(27)
二、順序名詞 .....	(29)



三、外来語名詞	30
練習問題二	32

### 第三章 用言(一)動詞

#### 第一節 動詞の分類

一、活用による分類	36
二、目的語による分類	39
三、待遇表現による分類	41
四、機能による分類	42

#### 第二節 動詞の活用形と用法

一、動詞の活用形	42
二、動詞の音便	46
三、各活用形の用法	48
四、動詞の復元と識別	56

#### 第三節 敬語動詞

一、尊敬語動詞	58
二、謙讓語動詞	62
三、丁寧語動詞	65

#### 第四節 補助動詞

一、通常語補助動詞	66
二、尊敬語補助動詞	68
三、謙讓語補助動詞	71
四、丁寧語補助動詞	73

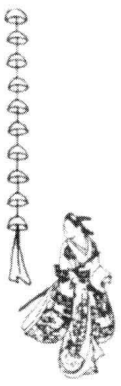
#### 練習問題三

### 第四章 用言(二)形容詞と形容動詞

#### 第一節 形容詞

一、形容詞の分類	78
二、形容詞の活用形と音便	79
三、ク活用・シク活用の用法	81
四、カリ活用の用法	85

#### 第二節 形容動詞



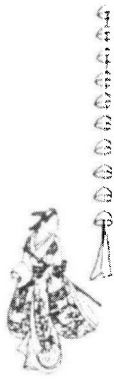


一、形容動詞の分類 .....	(88)
二、形容動詞の活用形と音便 .....	(89)
三、各活用形の用法 .....	(90)
練習問題四 .....	(95)
<b>第五章 副用語</b> .....	(98)
<b>第一節 副詞</b> .....	(98)
一、情態副詞 .....	(98)
二、程度副詞 .....	(100)
三、陳述副詞 .....	(100)
四、指示副詞 .....	(102)
<b>第二節 連体詞</b> .....	(104)
一、連体詞の用法 .....	(104)
二、連体詞の由来と構成 .....	(105)
<b>第三節 接続詞</b> .....	(106)
一、接続詞の意味と分類 .....	(107)
二、接続詞の機能 .....	(109)
<b>第四節 感動詞</b> .....	(110)
一、感動詞の用法と分類 .....	(110)
二、感動詞の由来と構成 .....	(112)
練習問題五 .....	(112)
<b>第六章 助動詞</b> .....	(116)
<b>第一節 助動詞の分類</b> .....	(116)
一、文法的な意味による分類 .....	(116)
二、活用による分類 .....	(117)
三、接続方法による分類 .....	(117)
<b>第二節 受身の助動詞</b> .....	(117)
一、接続と活用 .....	(118)
二、意味用法 .....	(118)
<b>第三節 可能の助動詞</b> .....	(119)
一、接続と活用 .....	(120)





二、意味用法 .....	(120)
<b>第四節 自発の助動詞 .....</b>	<b>(121)</b>
一、接続と活用 .....	(121)
二、意味用法 .....	(122)
<b>第五節 敬語の助動詞 .....</b>	<b>(123)</b>
一、接続と活用 .....	(123)
二、意味用法 .....	(125)
<b>第六節 使役の助動詞 .....</b>	<b>(127)</b>
一、接続と活用 .....	(127)
二、意味用法 .....	(128)
<b>第七節 打消の助動詞 .....</b>	<b>(129)</b>
一、接続と活用 .....	(129)
二、意味用法 .....	(130)
<b>第八節 打消推量の助動詞 .....</b>	<b>(132)</b>
一、接続と活用 .....	(132)
二、意味用法 .....	(133)
<b>第九節 推量の助動詞 .....</b>	<b>(135)</b>
一、接続と活用 .....	(135)
二、意味用法 .....	(138)
<b>第十節 過去の助動詞 .....</b>	<b>(145)</b>
一、接続と活用 .....	(145)
二、意味用法 .....	(146)
<b>第十一節 完了の助動詞 .....</b>	<b>(148)</b>
一、接続と活用 .....	(148)
二、意味用法 .....	(149)
<b>第十二節 希望の助動詞 .....</b>	<b>(152)</b>
一、接続と活用 .....	(152)
二、意味用法 .....	(153)
<b>第十三節 比況の助動詞 .....</b>	<b>(154)</b>
一、接続と活用 .....	(154)
二、意味用法 .....	(156)
<b>第十四節 指定の助動詞 .....</b>	<b>(157)</b>



一、接続と活用 .....	(157)
二、意味用法 .....	(159)
<b>第十五節 伝聞の助動詞 .....</b>	<b>(160)</b>
一、接続と活用 .....	(160)
二、意味用法 .....	(162)
<b>練習問題六 .....</b>	<b>(163)</b>
<b>第七章 助 詞 .....</b>	<b>(168)</b>
<b>第一節 助詞の分類 .....</b>	<b>(168)</b>
一、関係を表す助詞 .....	(168)
二、意味を補足する助詞 .....	(169)
<b>第二節 格助詞 .....</b>	<b>(169)</b>
一、が .....	(170)
二、を .....	(171)
三、に .....	(171)
四、へ .....	(173)
五、と .....	(174)
六、より .....	(175)
七、から .....	(177)
八、にて .....	(178)
九、して .....	(178)
十、の .....	(179)
<b>第三節 接続助詞 .....</b>	<b>(180)</b>
一、て .....	(180)
二、して .....	(181)
三、ながら .....	(182)
四、つつ .....	(183)
五、で .....	(184)
六、ば .....	(184)
七、ものから .....	(185)
八、ものゆゑ .....	(185)
九、とも .....	(186)



十、ど(ども)	.....	(186)
十一、に	.....	(187)
十二、を	.....	(187)
十三、が	.....	(188)
十四、も	.....	(189)
十五、ものの	.....	(189)
十六、ものを	.....	(189)
<b>第四節 并列助詞</b>	.....	(190)
一、と	.....	(190)
二、や	.....	(190)
三、か	.....	(191)
四、の	.....	(191)
五、に	.....	(191)
<b>第五節 係助詞</b>	.....	(192)
一、は	.....	(192)
二、も	.....	(193)
三、や(やは)	.....	(193)
四、か(かは)	.....	(194)
五、ぞ	.....	(194)
六、なむ(なん)	.....	(195)
七、こそ	.....	(195)
<b>第六節 副助詞</b>	.....	(196)
一、ばかり	.....	(196)
二、のみ	.....	(197)
三、まで	.....	(197)
四、だに	.....	(198)
五、すら	.....	(199)
六、さへ	.....	(199)
七、など	.....	(200)
八、し(しも)	.....	(200)
<b>第七節 終助詞</b>	.....	(201)
一、な	.....	(201)



二、なむ	(202)
三、ばや	(202)
四、が(がな)	(202)
五、か(かな、かも)	(203)
六、しか(しかな)	(203)
七、そ	(204)
八、かし	(205)
九、ね	(205)
十、や	(205)
十一、よ	(206)
十二、を	(206)
十三、こそ	(207)
<b>練習問題七</b>	(207)
<b>第八章 敬語</b>	(212)
<b>第一節 尊敬語</b>	(212)
一、動詞の尊敬語	(212)
二、名詞の尊敬語	(215)
三、尊敬語の序列	(216)
<b>第二節 謙讓語</b>	(217)
一、動詞の謙讓語	(217)
二、名詞の謙讓語	(219)
三、謙讓語の序列	(220)
<b>第三節 丁寧語</b>	(220)
一、動詞の丁寧語	(221)
二、名詞の丁寧語	(222)
<b>第四節 特別な敬語表現</b>	(222)
一、二重敬語	(222)
二、絶対敬語	(224)
<b>練習問題八</b>	(226)
<b>第九章 古典語の文体</b>	(230)



<b>第一節 古典語文体のいろいろ</b> .....	(230)
一、漢文と変体漢文 .....	(230)
二、万葉仮名文 .....	(231)
三、漢文訓読体 .....	(231)
四、平仮名文 .....	(232)
五、和漢混淆文 .....	(233)
六、候文 .....	(233)
七、近世文語体 .....	(234)
八、近代文語体 .....	(235)
<b>第二節 漢文訓読体</b> .....	(235)
一、訓点の読み方 .....	(235)
二、文字の読み方 .....	(238)
三、書き下し文 .....	(241)
<b>第三節 候文</b> .....	(243)
一、「候」の活用形と接続 .....	(243)
二、候文における敬語 .....	(245)
三、特殊な文字と用語 .....	(250)
四、候文の形式 .....	(256)
<b>練習問題九</b> .....	(259)
<b>古典作品</b> .....	(262)
一、奥の細道 .....	(262)
二、土佐日記 .....	(263)
三、更級日記 .....	(264)
四、徒然草 .....	(264)
五、枕草子 .....	(265)
六、方丈記 .....	(267)
七、竹取物語 .....	(268)
八、宇治拾遺物語 .....	(269)
九、平家物語 .....	(269)
十、伊勢物語 .....	(270)
十一、源氏物語 .....	(271)

十二、今昔物語集 .....	(272)
十三、漢詩と漢文 .....	(272)
十四、手紙と文書 .....	(273)
付録一 古代日本語の数体系 .....	(275)
付録二 ク語法 .....	(281)
付録三 候文述語構成表 .....	(284)
付録四 古典作品現代語訳 .....	(288)
練習問題正解 .....	(301)
参考文献 .....	(315)
用例出典 .....	(316)





# 第一章 古典語序説

## 第一節 古典日本語の概念

古典日本語は古代の日本人の交流手段である。言語学的に見れば、これも発音、語彙、文法、文字などの面から構成されたものである。本書は古典日本語の文法について記述するものであるが、必要な場合は発音、語彙、文字などに触れることもある。まず、古典日本語の基本的な概念について見てみよう。

### 一、口頭語と文章語

太古の日本語は文字がないので口頭語しかないが、漢字が日本に伝わってから日本語にも口頭語と文章語の区別ができるようになった。口頭語（話し言葉）は音声で表す言葉で、文章語（書き言葉）は文字で表す言葉である。理論的に言えば、古典日本語は現代日本語と同じように口頭語と文章語に分けられる。

現代日本語は現代の日本人が日常生活において毎日使っている言葉である。文章語は本や雑誌、新聞、書類などによって表現されるので保存することができる。口頭語はすぐ消えるものであるが、現代の科学技術によって記録・保存して後世に残すことも可能である。古典日本語は現代の日本人の日常生活では使われなくなり、科学技術の制限で古代の日本人がどのように日本語を話すかを、われわれは知るすべもない。したがって、現在われわれが接することのできる古典日本語はすべて文章語である。

### 二、現代語と古典語

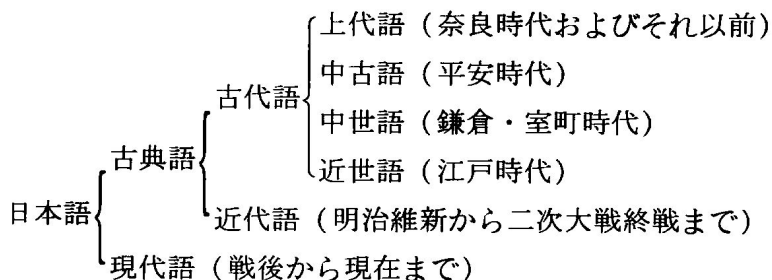
文章語としての古典日本語は漢字が日本に伝わってから始まったものであると言える。日本の歴史書によると、応神天皇時代（4世紀末～5世紀初頭、中国の晋代相当）に百済の学者である王仁が当時の天皇に『論語』10巻と『千字文』1巻を進呈し、日本に漢字をもたらしただという記載がある。それ以来、日本人は日本語を記録すべく漢字の使い方を身につけ、古典日本語を文章語として保存す



ることができた。

文献資料によれば、平安時代中期以前の日本語は口頭語と文章語がほぼ一致したものであるが、時代と共に口頭語が変化することによって、文章語との差が次第に生じてきた。時代の変遷に伴ってその差はますます拡大し、鎌倉・室町・江戸時代に至っては、口語体の文章が出現し、文語体と並存するようになった。明治時代の文章改革によって「言文一致」が提唱されたが、各種の文体が同時に行われ、混沌とした状態が続いた。その後、文章語を次第に口語化していったものと、日常の話し言葉を次第に文章化していったものという二つの流れが総合され、完全に文語体が口語体になるのは戦後のことである。1946年11月に、日本政府は内閣告示として「現代かなづかい」を公布し、1986年7月にさらに「改定現代仮名遣い」を公布した。これによって、仮名の発音と文字とは再び一致を保つことになった。

日本語は歴史的に見れば、よく上代語、中古語、中世語、近世語、近代語、現代語というように区分が行われている。上代語は奈良時代およびそれ以前、中古語は平安時代、中世語は鎌倉・室町時代、近世語は江戸時代、近代語は明治維新から第二次世界大戦終戦まで、現代語は戦後から現在までの日本語を、それぞれ指している。そのうち、上代語から近代語までは総合して「古典語」と呼ばれている。さらに上代語から近世語まで一括して広義の「古代語」とし、「近代語」と大きく二大対立を試みる説もある。次のようにまとめられる。



### 三、日本の歴史的時代区分

古典日本語の学習にあたって、日本の歴史的時代区分を知っておく必要がある。日本の歴史的時代は大きく、縄文時代、弥生時代、大和時代、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代、平成時代に分けられる。平安時代（中古語）は我が国の唐代中期から宋代後期まで、鎌倉・室町時代（中世語）は我が国の元代と明代、江戸時代（近





世語)は我が国の清代の大半、明治時代から二次大戦終戦まで(近代語)は我が国の清代末期から中華人民共和国の成立前まで、それぞれ大体において相当している。

日本と我が国の歴史的時代区分の対照は、次の表に示される。本書が記述しようとする古典日本語は主に中古語から近代語までの範囲である。奈良時代およびそれ以前の上代語は文章語として、一部を除いてほとんど漢文なので、検討の対象から除外する。

中国と日本の歴史的時代区分対照表

中	夏	商	周	秦	漢(前206)			三国 (220)	晋(265)			隋 (581)	
日	縄文			弥生(前200)				大和(300)					
紀元	前3000				0	100	200	300	400	500			
中	唐(618)			宋(960)			元 (1271)	明(1368)		清(1662)			
日	飛鳥 (593)	奈良 (710)	平安(794)			鎌倉 (1192)		室町(1336)		江戸(1603)	明治 (1867)		
紀元	600	700	800	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800
中	中华民国(1912)				中華人民共和国(1949)								
日	大正 (1912)		昭和 (1926)	二次大戦終戦(1945)				平成(1989)					
紀元	1900				1950				2000				

## 第二節 歴史的仮名遣

歴史的仮名遣(れきしてきかなづかい)とは、契沖仮名遣を発展させ、明治期以降、第二次世界大戦後の国語国字改革による「現代かなづかい」の公布までのほとんどの期間で、公教育の場で仮名遣いとして教えられてきた表記法である。

### 一、歴史的仮名遣の成立

日本語の仮名は漢字から発展してきたものである。平安時代末期(12世紀)